

夏期講習だより

第3号

文責 伊東 祐治 (箕輪北小学校)

6月5日(月) 第2回 夏期講習事前読み合わせ会報告

第2回読み合わせ 令和5年6月5日(月)

読み合わせ範囲 「西田哲学選集」第一巻 「西田幾多郎による西田哲学入門」 第二部 「善の研究」

第一編 純粹経験 第二章 思惟

司会者： 山本 幸介 先生 (南箕輪小学校)

レポーター： 寺澤 佑哉 先生 (箕輪中学校)

【レポーター発表 寺澤 佑哉 先生】

【p. 88, 1. 4~】

「思惟というのは心理学から見れば、表象間の関係を定めこれを統一する作用である。その最も単一なる形は判断であって、すなわち二つの表象の関係を定め、これを結合するのである。しかし我々は判断において二つの独立なる表象を結合するのではなく、かえって取る一つの全き表象を分析するのである。」

「思惟」という言葉の意味を調べてみると、「考えや思いを巡らせる行動であり、結論を出すなどの一定の状態に達するまでの過程で道筋や方法を模索する精神の活動」というような内容が出てきます。専門教科である理科において、このことを考えてみるのであれば、理科における思惟とは「科学的な思考をはたらかせ、論理的な考え方を行う」ということに当てはまるのではないかと思います。そして、さらに上に引用した文章に当てはめれば、「心理学的には、いくつかの現象における情報を一つの現象として結合することを判断というが、我々は、判断においてとあるひとつの理科的な現象から、さまざまな情報を分析する」というように考えることもできるのではないかと感じました。

【p. 95, 1. 15~】

我々は普通に思惟に由りて一般的なるものを知り、経験に由りて個体的なるものを知ると思っている。しかし個体を離れて一般的なるものがあるのではない、真に一般的なるものは個体的実現の背後における潜勢力である、個体の中にありてこれを発展せしむる力である、例えば植物の種子の如きものである。

「個体的」という言葉を「限定的」、「一事実から得られた特殊な事実」という意味で解釈したとすれば、この冒頭の一文は、今までの生活の中で当たり前と思っていた部分で、文章の中で数少ないじっくりときた部分でもあります。実際、普段の授業においても子どもたちの思考の流れは、限定的(この文章で言う「個体的»)な事実を知り、そこからそれらを推理(思惟)することで、一般的なことを学んでいくというようになっていくと感じています。また、この「個体」をある児童・生徒一個人とし、「一般」というものをクラス全体と考えてみることもできるのではないのでしょうか。真に「一般的」、クラスとして成り立つためには、「個体的実現」、つまり児童・生徒が個の願いや目標を実現しようとするときの活力(潜勢力)とも考えられるように思います。

【p. 97, 1. 9~】

かくいえばはなはだ異様に聞こえるだろうが、経験は時間、空間、個人を知るが故に時間、空間、個人以上である、個人あつての経験あるのではなく、経験あつて個人あるのである。

この文章の最後の「個人があつて経験あるのではなく、経験あつて個人あるのである。」というのは、なるほど確かにとハッとさせられたところでもあります。私がこの文章を読んで最初に、学校生活における生徒会などの活動における役員が思い浮かびました。生徒会や児童会の役員や部活動における部長、学級における学級長など、副担任として1年間いろいろな生徒を見てきましたが、どの生徒もこれらの経験を通して個として成

長を遂げていました。このような個としてのアイデンティティを経験が作り出していくのだろうとこの文章を読んで感じました。また、「経験は時間、空間、個人を知るが故に一」とあります。章の最後にまたわからない表現が来たと思いました。なんとなくの解釈ですが、経験が個を作り出すと考えれば、その経験は個を知る材料になるということかと思いました。章の最初に述べられていた「思惟」の意味と重ねてみれば、判断において「或る一つの全き表象」である個人を分析すると、さまざまな「独立なる表象」である経験を見ていくのではないのでしょうか。



【グループ討議のまとめ】

- 正直、とても難解であった。純粹経験・・・ 子ども達は、ここに何を考えているのか。それを教師が統合していく過程が『思惟』とも言える。
- レポートの実験の場面・・・ 具体的な姿・リアルな子の姿がもっと知りたい。例えば、生活科で裏山に行く・中学での探究など、自分たちが課題にどう向かっていくか、そこには失敗することや壁に当たることなどがあるが、子ども達と共に教師がどう歩んでいくのかが大事になってくる。
- 思惟とは何か・・・ 一般とは？ 経験とは？ 経験が個人をつくっていく。馬が走る→走る馬・・・ こういう転換が子どものみとりにつながる。どう切り取り、どうつなげていくか、そこには純粹経験が根底になっている。
- 我々はいろいろな経験から一般にしていく。一般に落とし込む。だから安心する。子供の言動を教師が「こうだから」と一般化して安心する。でも、これは本当にいいことなのか？ 一般に落とし込むのではなく、個々をしっかりと見ていくことが大事。我々はどことんな経験がないが、それでも精一杯考えていく。それが思惟なのかもしれない。
- 個→経験 ではなく、経験→個 になるというレポートはわかりやすかった。思惟とはつまり、経験と言ってもよい。

【唐澤正吉先生より】

- 寺沢先生のレポートの、特に2つ目は的を得ている。西田哲学の考え方に沿っている。
- 西田は「我は、過去の無数の人・ものとの関係づけられたものであり、未来の無数の人・ものとの関係づけられたものである。関係づけられたからの我がある。」と言っている。我は一人のものではない。宇宙・自然に育てられている。
- パスカルの『人間は考える葦である』を考えてみたい。人は葦のような小さな働きであっても、社会や文化を映すものであり、自らの内と外を形成していく。考えることは独りになること。一本の葦のような小さくて弱い存在であっても、時間・空間以上である。
- 思惟することで、個ができていく。考えることで、自分・本物が築かれていく。